

## 快適空間を作り出す静狩湿原の食虫植物

北斗市 長谷 昭

### はじめに

道南の低地の湿原としては、長万部町の静狩湿原と黒松内町の歌才湿原がよく知られている。湿原としての学術的価値は道内最古の湿原の1つとされる歌才湿原が高いとされている(辻井・橘 2003)が、現在の面積はわずかに 5ha 程度であり、国道 5 号が湿原の真ん中を貫通していることもあり乾燥化が進み、植生保護のために立ち入り禁止になっている。一方静狩湿原は、かつては 800ha もの面積があり天然記念物に指定されていたが、戦後周辺の農地開拓が進み、天然記念物解除とともに 34ha まで縮小してしまった(辻井ほか 2007)。いずれも「絶滅危惧」ならぬ「消滅危惧」湿原ともいえる状態であるが、静狩湿原の方がまだかつての面影を残していると言える。

静狩湿原は保護されているが立ち入り禁止ではないので、比較的多くの植物愛好家が訪れ、湿原植物を楽しんでいる。筆者も

その 1 人であるが、足場の悪さを除き、春から秋のどの季節でも快適に湿原植物を観察できた。その快適さの理由は、湿地・湿原に付きものの蚊やブユ(ブヨ)に悩まされるのがほとんどないことであり、せいぜい、周辺の牧場方向から飛んでくる大型のアブに時々つきまといわれる程度である。

静狩湿原の植物に関する学術調査は、最近では北海道大学北方生物圏フィールド科学センター(植物園)の富士田裕子教授の研究室が行っており、その成果が論文として公表されている(Lee et al. 2016)。また、道内の植物を対象とする図鑑類でも、静狩湿原で撮影した植物が多く紹介されている。そこで本稿では、快適空間静狩湿原を作り出す食虫植物に絞って紹介したい。

### 静狩湿原の食虫植物

静狩湿原には大小 10 個ほどの池塘が分布しているが、その多くにタヌキモ類が



図1 池塘で繁茂するタヌキモ類 花がなく種を特定できなかったが、透明感がある捕虫囊をびっしりと付けている。2016年8月23日撮影



図2 タヌキモの花とツボミ 2016年8月8日撮影